ソ連軍との戦い　シベリア抑留記

ソ連軍の侵略・交戦

わたしは昭和十九（一九四四）年二月、旧制中学校を卒業後、満州製鉄株式会社に入社、年齢くり上げで二十歳前に※徴兵検査を受け、同年六月、満州第一五二二三部隊に入隊して陣地をつくる任務に着いた。

昭和二十年八月九日。

突然、ソ連軍が国境を越えて侵入したという知らせを受けて、わたしたちは、急きょ戦闘配置についた。翌日、ソ連軍は戦車を先頭に攻めてきた。友軍は弾薬も

兵器も少ない。道路の両側の丘で反撃したが、敵の砲火はものすごく、難なく中央線を突破して攻めてきた。夜になっても、耳をおおうような砲火、花火のように飛び交う爆弾の嵐の中でどうしようもなかった。

敵の先頭部隊は、戦車、歩兵が入り乱れて友軍の陣地を突破し、歩兵部隊は自動小銃を肩に友軍を撃ちまくる。友軍は相当な戦死者が出て、第二機関銃中隊も、わずか四十人にも満たない人員だ。すでに戦闘力なし。食料も乾パン二袋が配給されたのみである。道もない山坂を黙々と空腹にたえ、流れる汗をふきながらの撤退である。

撤退を始めて二日目、つかれ果てて、機関銃のような重いものは地中にうめることにした。敵と突然会えば射殺されるか手榴弾で自殺するしかない。

いよいよ死を覚悟しなくてはならない。しかし、ここで死んだら、家族や肉親に

※徴兵……7ページの注を参照
※手榴弾……手投げ用の小さな爆弾

は死亡の場所も日時も分からず、骨も遺品も届かないだろう。
配給された乾パンはすでになく、胃袋の中では、歩くたびに水が音をたてるのみ。
雨に打たれ、夜ともなれば寒さにふるえ、つかれた体に睡魔がおそってくる。
背たけほどのびた草の中に点々と打ち伏しながら、指揮官の命令を待った。

孤独の逃避行

それからどのぐらい時間が過ぎたことだろう。
まぶたの裏に光がゆれている。辺りはしーんとして物音ひとつしない。
そっと目を開けてみた。太陽の光がまぶしい。
体を起こして辺りを見回したが、だれもいない。
どこまでも広がる草原にたったひとり。ほかの戦友はいったいどうしたのだろう。
戦闘の悪夢が頭をかすめた。すさまじい爆音がまだ耳の奥に残っている。
しかし、おれは今、生きている！

ふいにふるえるような感動が全身をつきぬけた。
じわじわと心の底から勇気がわいてきた。
命あるかぎり、束縛も命令もない自分の意志と力で生きていこうと心に決めた。
太陽が昇り、ぬれた軍服から湯気が立っている。
現在地も分からないが、とにかく南に行こうと第一歩をふみだした。
果てしなく続く草原、耕した土地も民家もない、手つかずの自然そのものの静けさだ。
心を静めてしんしんと歩いた。
どこまでも続く小高い丘を下って、でこぼこ道を出て、獣道を行くと、道らしい所に出た。
木の枝のしげり方で、南と思われる方角に向かった。
日時も分からない。ただただ歩いた。途中、日本兵の野営の跡らしい所に出あう。

※野営……25ページの注を参照

その中に鱈の干物を見つけた。数日の絶食、食べられるものは何でも食べなくてはならない。泥水でも飲まなくてはならない。

何日かぶりにふくらんだ胃袋に満足して、大の字に寝ころんで天をあおいだ。白い雲が東に流れていく。

満腹と共に力がわき、破れた軍靴を、のこされていた品物の中から見つけた地下足袋にかえた。足も軽くなり再び出発だ。

日が暮れて数時間。月光をたよりにただ歩く。また朝がきた。ひたすら南へ。途中、日本兵の死体が放置されていた。合掌。

明日はわが身。しかし、あわれさも悲しさもわいてこない。すでに考える余裕もない。戦争とは、まともな人間には想像もつかないものである。

再び歩き続けた。何とかして民家に出あいたい。人が恋しい。

夕闇もせまり、今夜も草むらで休むのかと考えていたとき、ふと人の気配がした。

暗闇の草むらに伏して、全神経を耳にして辺りをうかがう。
たしかに人の気配は近い。しかし静かだ。戦争で離散した日本兵にちがいないと判断して、手榴弾を片手に静かに近づいた。五、六人がひそひそと話をしている。
日本兵だ！　がぜん元気が出た。
「日本兵だ！」
と声に出してみた。
ぎょっとした数人が立ち上がった。
急いで部隊名と名前を言うと、何とか受け入れてくれた。下士官以下数人、鉄鍋のようなもので食事中。肉とジャガイモを塩で煮たものだった。事情を話して何とか食事にありついた。この谷間は敗残兵が集まる所らしい。多人数で移動すると危険だという。日本軍は前線でほとんど敗退している。牡丹江市辺りで集結するしかないとか。この集団は連隊本部の兵だとのことで、このような時でも上官の命令は守らなくてはならない。

〝地獄に仏〟のわたしの喜びは、一瞬のうちに消えた。
少しの馬肉を分けてもらって夜明け前、また、一人での逃避行だ。

出会いと別れ・敗戦

一時間ほど歩いたとき、今度は向こうから呼び止められた。
伍長の襟章に日本刀を持った兵隊と小銃を持った兵隊の二人だ。三人寄れば心強い。
おたがいに持ち合わせの食料を出し合い、行動を共にすることにした。
「あわてるな、死を急ぐな」
「何とかして生きのびよう」
三人の思いは一つだ。
一日歩き草むらに寝て、翌朝、幸運にも民家を見つけた。周囲を警戒しながら近づく。青々とした畑に近づくとスイカ畑だ。帯剣で割ってかぶりついた。小さな農

家が五、六戸点在し、下った所にせせらぎが流れていた。静かに近づいたが人の気配はない。早速物色するとジャガイモ、味噌などの収穫があった。逃げおくれたブタを射殺。谷間の小川のほとりで炊飯、豚肉入りの食事は久しぶりである。小川で体をふき、下着を洗って久々のいこいの時である。

夜は山林に寝て、夜が明けると集落を訪れて食料を調達、不定期ではあったが、何とか胃袋を満たし数日間の逃避行が続いた。

しばらく行くと小高い丘が見えてきた。草原の向こうに道路が見える。トラックらしい車が砂ぼこりを巻き上げながら走っている。たぶん、町が近くにあるのかもしれない。

現在、日本軍はどの辺りで戦っているのだろうか？　国境や東満※地区の敗戦は想像できたが、あとはまったく分からない。

※襟章……51ページの注を参照
※帯剣……剣を腰などにつけること、またはつけた剣
※東満……満州（現在の中国東北部）の東部

じつは、この日はすでに日本の無条件降伏、敗戦となっていたのだが、我々はまったく知らなかった。

祖国の勝利、本土決戦と、頑固に信じ続けていたのだ。

とにかく本道に出て町に近づこうと決めた三人は、わずかな希望を求めて山道を急ぐ。そこで、本道に近いしげみの中で、わたしの中隊の兵士たちに出会った。

入隊して三か月余りの間、※初年兵のわたしはほとんど話す機会もなかったが、自分から名乗って元の隊に加わることにした。そのために、いっしょに行動した二人とは別れなくてはならなくなった。

「必ず生きて日本に帰ろう」

と、ちかい合った。二人は名残りをおしみながら、いずこかへ去っていった。

※初年兵……40ページの注を参照

二人と別れてから、わたしは中隊長の指示に従い、町に通じる大通りに出た。
すると、あちこちから、つかれ切った日本兵が道に出てきた。
傷ついて道にうずくまる者、道端にたおれる者、集団におくれて歩いていく者、みんな自分の体力の限界にきていた。もう、軍隊でも組織でもない。人のことを考える心のゆとりなどない。どうなるのか分からないが、何となく同じ方向に歩いていくだけである。
やがて市街地が見えてきた。牡丹江であろう。
そのとき、ソ連兵数人が出てきて、自動小銃を構え何か言っている。そして、通訳が告げる。
「戦争は終わった。日本兵は集結して日本に帰国させる。これから武装解除をする」
戦争は終わったんだ。そして生きて日本に帰れる、安堵と熱い思いがこみ上げてきた。

希望は絶たれて

武装解除ですべての兵器が積み上げられ、腕時計、眼鏡、万年筆など、すべての持ち物が※略奪された。その後は完全なソ連軍の支配下に入った。

自動小銃をつきつけられ、怒鳴られ、せき立てられ、数時間歩かされて到着したのは旧日本軍営舎だった。二段ベッドの営舎はすしづめで空間はない。

敗戦したことは知っていたが、無条件降伏だとは知らなかった。

不定期に配られる食事は、※高粱や※唐きびの粉のスープで、それも先を争わないとありつけない。何とあわれな生活だろう。八月九日ソ連軍との開戦以来、逃避行もふくめ、約二十日間、一度もまともな食事をしたことがなかった。疲労と栄養不足で日ごとに体力の衰えを感じた。

※武装解除……17ページの注を参照
※略奪……力ずくで無理に奪い取ること
※高粱……40ページの注を参照
※唐きび……トウモロコシ

九月の下旬ごろ、帰国の輸送が始まったとの情報が流れた。千人くらいの隊列を組んで営舎を出発している。

我々にもその時がついにきた。

「つらかった営舎よ！　さらば」

と、あふれる希望を背負って駅に向かった。

真っ黒な貨車に乗せられた。中は二段に区切られ、足をのばす隙間もないほどつめこまれた。入口を閉じられると中は真っ暗である。しかし、少しでも早く乗車できたことに感謝した。

汽車は駅をはなれた。しかし、進行方向は南満州や南朝鮮とは反対である。一抹の不安が走る。だれかが、

「汽車はシベリア鉄道を走り、ロシアの日本海に位置するウラジオストック港から帰国するのだろう」

※満州……現在の中国東北部

と言った。

（なるほど、戦争が終わったんだ）と一人納得。

鉄道を走る音に夢をたくしてねむりに落ちた。何時間走ったことだろう。

突然停止した列車から線路に降りた。一面の草原に風が吹き、遠くに白樺の林が見える。

線路脇の空き地で炊事、食事と水分を補給し、乗車した。

再び列車は走りはじめた。二階にいる者が相変わらず、列車は西に走っているという。代わる代わるのぞいて見たが、朝日に対して確かに反対である。

車内が騒然となった。そしてだれもがだまりこんだ。

「万事休す」だまされた！

我々は捕虜としてソ連に連行されるのだ。もう帰れない。銃殺か奴隷であろう。

自らのおろかさと不運にかすかな夢も打ちくだかれ、深い谷間につき落とされた気持ちだ。

あれほどの苦難にたえ、生きて祖国の土をふむことを夢見てきたのに。いっそ、脱走しておけばよかった！　全身から力がぬけていく。

地獄のシベリア抑留生活

白樺林の中を切り開いて、有刺鉄線で囲んだ中に大きな天幕が建てられていた。そこが、我々の収容所となった。

幕舎内は二段式で少しばかりの枯れ草が敷いてあった。

貨車とちがい、足をのばせるだけ、まだましだ。

つかれ果てた体を横たえて、死人のように目を閉じる。

一寸先の運命も分からない。自分の意志と努力ではどうしようもない境遇に、ただただ無念の涙が流れる。流れる涙をふく気力もなく、いつの間にかねむってし

※捕虜……戦争中、敵に捕らえられた人
※有刺鉄線……とげのついた鉄線
※天幕……テント

まった。

翌朝、身体検査。六十キロ近くあった体重も約二か月で四十キロをきり、骨と皮ばかりである。検査の結果、最低の五級で収容所の軽作業と決められた。

このように、自由を束縛され、無理やりに仕事をさせられ、まるで奴隷のような生活が始まった。食べ物も貧しく栄養のある物はほとんどなく、体の健康を保つことはできない。時々、生ニシンの塩づけを一匹配られる。

久しぶりの配給。みんな大喜びでうす暗い宿舎で焼く。焼けるまで側にいなくてはならない。少しでも目をはなすと、すぐにぬすまれてしまう。

人の物は取ってはいけないという当たり前のことも、ここでは通用しない。それほど空腹は、たえられない苦しみなのだ。

十月末になると、寒気はせまり特に夜は寒い。斜面に穴を掘って天井を土でおおった宿舎が作られた。中央にペーチカ※代わりのドラム缶のストーブが置かれた。

しかし、寒さは、しんしんと弱った体をむしばみ、栄養失調、赤痢の発生などで

毎日のように、数人の死者が出た。となりで寝ていた友人が一声もなく、朝は冷たい死体となっていた。明日はわが身かと考えるだけでもあわれである。

十二月、いよいよ寒さが厳しくなる。零下二十度から三十度にもなる。鉄棒を使っての大小便の破壊作業、死体の埋葬作業。とがった鉄棒も容易に凍った土にはつきささらない。これも五級の仕事だ。

中旬、激しいせきと高熱で苦しんだ。診断の結果は分からなかったが、多分肺炎ではなかっただろうか。二日後、本部収容所に移送するという。この収容所では、すでに百人近くの人が死亡したことだろう。

その人の名前も出身地も分からない。衣服まではぎ取られ、林の中に埋葬された事実は、この世での地獄絵図である。いよいよここでたおれるのか、と思った。

※ペーチカ……暖房装置の一種。石・れんが・ねん土などで、建物につくりつけた暖炉

医療収容所で人間になれた

少し熱が下がったので二日目に移された所は、鉄道に沿った集落がある、大きな収容所だった。[26] ビロビジャン収容所と聞いた。何日ぶりかで屋根と床のある、まともな家に入れるらしい。

連れていかれた部屋は病人ばかりだ。

食事もいくらかましになった。大きな黒パンも支給された。

それでも空腹は満たされないが、少しは体力がつきそうだ。幸い病気も日ごとに回復し、時には収容所内の掃除にかり出されるほどになった。

薬も医療器具もなく心細かったが、あの寒さから逃れられたのは幸運だったと、思わなくてはならない。

数日後に入浴に連れていかれた。衣服はシラミ駆除のためにすべて熱気消毒。桶一杯の熱湯で、洗面から体を洗うまで、すべてをすまさなくてはならない。

八月九日、戦闘態勢に入って以来五か月ぶり、初めてのまともな入浴である。

あかを落とした体に消毒された温かい衣服、生き返った気持ちだった。
帰りがけに日本の将校団に会った。彼らは服装も立派で元気そうだった。
「体を大切に頑張れよ」
久々に激励の言葉を聞き、ほっと温かい気持ちに返った一時だった。
食事と静養、若さもあり、日ごとに体調は回復してきた。
時々休日もあり、収容所内で慰安演芸会も催された。非戦闘部隊や特務機関の関係者もいたり、背広やネクタイ、中国服までそろっていて盛大なものだった。
見事な演芸や歌や踊りで、現状を忘れて笑う一時もあった。
三月も下旬。シベリアはまだ寒いが、少しずつ春の陽ざしを感じるころ、少しずつ元気を取りもどしていたわたしは、数人の仲間といっしょに呼びだされた。わたしは、再び、作業にもどされる恐怖にふるえていた。でも仕方がない。
とらわれの身ではどうにもならない。翌朝、不安におののきながら監視兵に付きそわれて収容所を出発した。

信頼の中で起きた事故

連行先は、シベリア鉄道沿いのビラカン地区にある、コルホーズ農場の収容所だった。

目的地のビラカンが、鉄道の土手から左斜面に川をへだてて広がり、家屋や平地が見えてきた。

駅の周りには民家が建っていた。

百メートルほど、凍った川を渡り、官舎らしい建物前の道路を通り、収容所に着いた。

日本人約百人、ドイツ人捕虜五十人くらいが別棟に収容されている。仕事はまき用の木材の収集で、健康回復前の中間収容所らしい。

翌朝、ドイツ兵の朝の点呼を見た。体格もがんじょうで、服装も整然と行進する姿は、実に堂々としていた。民族のほこりを持ち、祖国の復興を信じているという。我々も元気を取りもどさなくてはと思った。

雪におおわれた山で、たおれた木や切りたおした大木を集め、凍った川を馬で運ぶ作業が続く。ペーチカ用のまきは簡単に確保できるから、一晩中暖房もできる。同行のロシア人や行き交う民間人も人なつっこくて親切である。たばこ、巻紙、松の実、ヒマワリの実と、惜しみなく袋をはたいてくれた。

しかし、風が吹けば零下五十度をこす。足指を動かしていないと凍傷になると言い、一応作業は中止となる。

春はほんの一時。一斉に草木が萌え出たかと思うと、すぐ短い夏がやってくる。虫にさされながらキャベツやキュウリを収穫する。ジャガイモの収穫は、お腹を満たすのに最適。そでなどにかくして持ち帰ったりする。収容所を出ての農作業は、心の解放感と自由を味わい、また、監視兵とも親しくなり、いい人間関係ができはじめた。

このような信頼の中で、突然大事件が起きてしまった。小隊の指揮官であるY軍

※コルホーズ……旧ソ連などで行っていた、共同で経営する農場

曹と、その助手N伍長の脱走である。

Y軍曹以下約三十人くらい、健康な者だけで編成され草かりをしていた。約一週間、テントと食料を持って収容所をはなれて作業することになった。近くに十メートルくらいの小川が流れ、魚つりや貝採りで、食料には事欠かない。炊事、洗面、水浴とまったく自由な生活だ。

しかし、作業終了の前夜に二人が脱走した。

状況は一転した。監視兵があわてて全員集合を命じ、行動を開始したのは夜が明けてからだった。信用しすぎたソ連兵にも同情したが、二人が何とか逃亡に成功すればと祈りながら収容所に帰った。

脱走した二人は、果てしない草原と永久凍土、増水した大河にはばまれて目的を果たせず、四日目の午後についに捕らえられた。我々は暗い顔で目を伏せ、どこかへ連れ去られる二人を見送った。

帰国の夢かなって

※抑留されて一年となる。

収容所長から呼び出しがかかり、所長宅の手伝いを命じられた。

家屋の修理、まき割り、水くみといそがしいが、作業よりはずっと楽だ。

その上、時々、パンやスープなどをご馳走してくれるマダムである。

大工・左官の経験があるKは先輩で、その手伝いもするようになった。

食料事情も少しずつ良くなり、正月には炊事係の方で何とか正月気分を味わう工夫もされてきた。

うれしいことに第一回の内地（日本）への手紙も許された。

シベリアの地に抑留されていることも、生死さえ家族は知らないであろう。

着くかどうか分からないが、元気で生きていると書いた。

※抑留……51ページの注を参照

故郷への思いはつのるばかりだ。あの空は日本に続いている！

平穏な日々が続いた三月初旬。

事務室に数人が呼び出され、「東京ダモイ（日本へ帰国）」と言われた。

夢ではないか！　信じられない。元気になった現在、また、厳しい作業隊へ移されるのではないかと疑う反面、残留のみんなにすまないと思いつつも一刻も早く旅立ちたい思いも募る。

一行は、収容所に集まり、入浴や下着の交換を済ませた。翌日出発だという。

貨車は日本海に面したナホトカ[22]へ向かうという。すでに帰還列車が数回走ったと聞くと、がぜん夢がふくらむ。着替えその他、身の回り品は何もない。でも、もう裸でもよい、食べなくてもよい、一刻も早く港へと心はおどった。

列車は二十数時間も走ったか、ナホトカである。小さな港。潮の香りがなつかしい。

一週間後、いよいよ乗船の日が来た。船には日の丸の旗がひらめき、「大郁丸」と書かれた日本の文字がなつかしい。

作業をしている日本人が手をふっている。

胸がいっぱいになった。一日も早く帰国できるように神に祈った。

甲板で、日本人の船員と看護婦さんが出むかえている。

「ご苦労さまでした。お帰りなさい」

の温かい言葉に胸が熱くなった。夢ではない、助かったのだ。

「日本に帰れる！」

「ニホンニカエレル！」

「日本に！　帰れるんだ！」

何度もこの言葉を心の中でさけび、確認した。

「大郁丸」はいよいよ出港、対岸の小高い山がだんだん遠ざかっていく。

一刻も早くこの地を去りたい！　悪夢のような一年半。再び訪れることもないだ

ろうと思いながらも感無量である。

船内で出た日本食。真っ白いご飯に味噌汁。漬け物。一年八か月ぶりの日本食、こんなうまいものであったのか。

波一つない海原。祖国に続く日本海を順調に舞鶴港へ向かった！

はるかにかすんで見えてきた島、みるみるうちに山や木が鮮明になってくる。

祖国はこんなにも美しかったか、改めて強烈な印象である。

涙があふれて止まらない。

昭和二十二年四月二十六日ごろ、夢に見た故郷日本の土をやっとふむことができた！

ばんざい！　ばんざい！

生きていたい！　死ぬことはいやだと、心の中に秘めながらも忠君愛国、それが国民の最高の道徳と信じて、死を美化し戦場に向かった過去はいったい何だった

のか？

人の命、尊厳がこんなに尊ばれる平和な現在では夢にも思えないことであるが、多くの若者が、未来を信じつつも死を選ばなくてはならなかった時代。

どんな美名の下にも戦争による殺戮は許すことはできない！

（原作　西川　勝「ソ連軍との交戦とシベリア抑留記」）